

P81

P 洞は、私の記憶の中にある品のある街とは似ても似つかなかった。

昔ながらの瓦ぶきの大きな家は、地面に半分埋もれてしまったかのように見えるほどみすぼらしく、毎朝箒の跡が美しかった路地は、歩道のブロックが荒れ果てて飛び出てしまいでこぼこしていた。

家々はこぞって間仕切りを家の軒先まで押しやり家は見る影もなく、ただでさえ狭い路地をさらに狭くしていた。私は、そんな薄汚い路地を、記憶をたどりながら安宿のある三叉路まで歩いて行く間に、この街で暮らす人々を一括りにして、取るに足らない人たちだと早々に見下していた。

安宿がある三叉路から左に曲がって右から3軒目の家もやはり柱が傾き、門の敷居が道より低く、沈没する廃船のように思える古い家だった。表札も番地もない。私は向かいの家の門の前まで下がり、その古い家の大きくしなった屋根の大棟と瓦の間から生えている草を眺めてから、門の隙間から中の様子をのぞいてみた。今にも倒れそうな家だが、部屋と部屋の間隔は広いようで、いろんなごみ箱が何個か置かれ、どれも溢れんばかりになっているところをみると、何家族かが住んでいるようだった。

私は大きく咳払いをしながら門を押した。玄関のすぐ脇に作られた部屋の練炭の焚口前で、しゃがんで煮沸している洗濯物を棒でかき混ぜていた女がちらりと見上げた。開いたままの中門からは、思いのほか広い前庭と何家族かが借りている部屋が見えたが、私は間違いなくこの玄関脇の部屋にノウネおじさんが横たわっていると思った。ソンピョ兄さんから聞いた大便の話が即座に連想させられるほどの酷い臭いがしたからだ。

P91

ほどなくしておじさんは、力を手にしたかのように唇を動かしたのは確かだった。私は、彼の虚ろな目に静かな歓喜が微かに漂うのをはっきりと見たし、彼の唇から発せられた言葉を確認に聞いた。

“ウンピョ、ああ、ウンピョ”

おじさんは、そう言っていた。私は、おじさんが彼の息子を振り捨て、代わりに甥を連れて避難してきてからは、彼が息子の名前を口にするこも、聞くこも一度としてなかった。ウンピョの片割れだった私をみたら、ウンピョもどこかの空の下で死なずに生きていればこれくらいになっているだろうに、と悲観している姿でも目にするこもあるはずなのに、一度たりともなかった。彼は息子を捨てたと同時に息子の名前まで忘れてっしまっただけでなく、記憶すら消し去り生きている人のようだった。息子の代わりに甥を連れ

て避難してきたと自慢をするときの息子も、ただの名詞としての息子であってウンピョという固有名詞としての息子じゃなかった。

彼が初めて口にしたウンピョという声は、私だけがようやく聞き取ることができるくらい微かなものだった。けれども私の耳には胸が張り裂けんばかりの声に聞こえた。彼は死に物狂いで胸がえぐられるほどの思いで叫び声をあげているのだ。ああ、30余年前にウンピョの母が叫んだ悲痛な叫びは今ようやく仕返しを果たしたのだ。

私はそうなることを長い間待ち望んできたのに、快感よりも虚しさを覚えぎよつとした。

再びキーホルダー売りが立ち並ぶ通りに出たときには、陽が沈もうとしていた。陽が沈むころになると、胸に沢山の様々な鍵をぶら下げたまま、米の入った袋と塩鯖を手にしてよろよろと歩いているノウネおじさんの姿が思い出された。米の入った袋と塩鯖のせいなのか、鍵が勲章に見えたときのようなとんでもない錯覚は起きなかった。彼は孤独でみすぼらしい鍵売りに過ぎなかったのだ。

私が彼を直視できるまでに少なくとも32年かかったのだった。